

まんたら通信

第194号 (通巻230号)

平成24年08月 西暦2012年 佛暦2578年 皇紀2672年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口 1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



「一切れのパン 幼いマリコに」

ジョージ・アリヨシさん(81歳)が、占領軍兵士として東京に来たのは、敗戦の年の秋だったそうです。激しい爆撃で廃虚になった東京で、わずかに焼け残った丸の内の旧郵船ビルの兵舎を出て、初めて会った日本人が、七歳の靴磨きの少年だったという事です。靴磨きをしている僅かの間の会話から、

少年の両親が亡くなったこと、三歳の妹と二人暮らしであることを知りました。小学校一、二年生の幼い子供が、迫り来る冬の前に、どんな思いで日々を送っていたことでしょうか。その年はおかたつてない凶作で、一千万人の国民が餓死するだろうと言われていたそうです。少年のひもじさは、傍目にもはっきり分かる様子でしたが、背筋をしつかりと伸ばして、ときばきと受け答えしていたそうです。

アリヨシさんは急いで兵舎に帰り、持出しが禁じられていたパンに、バターとジャムを塗ってナプキンで包み、急ぎ取って返して、少年に渡しました。少年は「ありがたうございます」といながら、靴クリームやブラシを入れる箱にしまい込みました。

不思議に思ったアリヨシさんが、何故食べないのかと聞いたところ「お腹は空いていますが、家で待っています。マリコと一緒に食べたいのです」という答えが返ってきました。

その後、二ヶ月で日本を離れるまでの間、ハワイ出身の仲間と一緒に少年を手助けしたそうです。この、七歳のお腹を空かせた少年が、三歳の妹のマリコと、僅か

一切れのパンを分かち合おうとした心に深く感動したアリヨシさんは、その後来日の度に手を尽くして少年の消息を尋ねましたが、名前を聞き漏らしたこともあって、ついに会うことが出来ずにいるそうです。

以上は、十一月六日付産経新聞『やばいぞ日本』第4部『忘れてしまったもの』、論説副委員長の中静記者の記事です。話を伝え聞いた中静記者が、ハワイのアリヨシさんに経緯を確かめるため問い合わせた手紙への返事には「荒廃した国家を経済大国に変えた日本を考えるたびに、あの少年の気概と心情を思い出す。それは『国のために』という日本国民の精神と犠牲を象徴するものだ。そして、幾星霜が過ぎ、日本は変わった。今日の日本は生きるための戦いをしなくてよい。殆どの人々は、両親や祖母が新しい日本を作るために払った努力と犠牲のことを知らない。総てのことは容易に手に入る。そうした人たちは今こそ、七歳の靴磨きの少年の、家族や国を思う気概と苦闘をもう一度考えるべきである。義理、責任、恩、おかげさまで、という言葉が思い浮かぶ」と記されているそうです。そして中静記者は返信の意味について、「親殺し、子殺し、数々の不正や偽装が伝えられる中、もう一度嘗ての日本の心に思いを馳せて、凛とした日本人たれという、祖国への思いが凝縮されていた。」と締めくくっております。ご存知の方も多いと思いますが、ジョージ・アリヨシさんは、ハワイ生まれの日系二世。日系人としてアメリカで初めての州知事をお勤めになった方です。

先月号で紹介した、台湾人の金美齡さんもそうですが、岡目八目の言葉通りで、海外から見ると戦後の日本の異常さが目立つのでしょうか。ドイツでは、クライン孝子さんも日本を憂えています。

◆立秋が過ぎましたから、暦の上では秋ですが、これからが残暑。ゆめゆめ体調には気をつけなければと気を引き締めています。◆今月のお話は、平成19年11月(137号)の再掲です。今、例えばじめ問題では、逃げ回って責任を取ろうとしない学校や教育委員会、捜査を頼まれる方の警察の破廉恥な不祥事。アリヨシさんが心配する、「義理、責任、恩、おかげさまでという言葉」をもう一度確かめたいからです。アリヨシさんは86歳になり、ご健在だそうです。◆上の写真。ランボクナガマの成田幼稚園の近くの空き地に、毎週日曜日

何れにしても、凛と誇り高いこのお顔が素晴らしいと思います。日本にも『ボロは着ても心は錦』とか『起きて半畳、寝て一畳』という言葉がありますね。お金がないのは恥ずかしいことではないと。いんちきで集めたお金は、これはもう、この上なく恥ずかしいことです。◆お祭りの後で、青年会のお兄さんが、参加した子どもたちにお小遣いをくれたそうです。何十人の中で「ありがとう」が言えたのは、たったの二人だったとか。やれやれ。◆今月の野草はクズの花です。マメ科というだけに花の形もよし。匂いも好ましいですね。本当は今月末辺りから咲きはじめますね。2012/08/09 龍渉



余滴

にっぽん人情小噺

三遊亭鳳豊

第七十九話 自分と未来

えー、昔から親孝行というのはむずかしいものですが、その昔、掃除に使う「はたき」を売っている店がございまして、これが見たいという繁盛したそうで、あまりに売れ行きがよいので、息子にのれんわけをさせたそうです。

ところが、どういうわけか、息子に店を出させた時からお父さんの店の「はたき」が売れません。では、息子の店はどうかと言いますと、これがすごい。連日人だかりがするような売れ行きで……お父さんは、これには参りました。

しかし、親孝行な息子は、自分が店を出したばかりに、お父さんの店の「はたき」が売れなくなつたことを知ると、自らお父さんの店に行つて、「はたき」を店先で売つたのです。

「はい、はたきどうですか！ いいはたきですよ」

息子が声をかけると、すぐに人だかりができて、売れる、売れる。それからというもの、息子は自分の店を放つぽって、お父さんの店のために一生懸命働いた。

これがお上の耳に入りまして、「えらい息子じゃ、褒めてつかわす」と小判をいただいたというのでございませぬ。なぜそんなことぐらいでお上が褒めたか。

お奉行様に聞いてみたら、こう言つたそうですよ。「親のはたきを見事にうつた」……。

長い話のわりには、オチがイマイチでしたが、今日は父親と仲直りをしようとした三男坊の話でございます。

加賀百万石の城下町、金沢には全国の秀才が集う名門金沢大学があります。こ

の金沢大学教授、天野良平さんが本日の主人公です。

天野先生、大学教授ですから、もちろん偉いのですが、人柄がよいせいとか、学生たちに変な人気で、特に女子大学生に囲まれて、羨ましがられています。

しかし、そんな天野先生にも、悩みがありました。それは、岐阜にいるお父さんとの気持ちの行き違いでした。なぜ、お父さんとギクシャクしているか、それにはこんな理由がありました。

天野さんは、岐阜県郡上の出身。天野家の三男坊。そうです。郡上踊りで有名です。

♪郡上のなあ、はちまきんぐ出ていくとききは ア、ソレンセー

……歌うことないか。

お父さんは、それこそ、昔のお父さんですから、頑固一徹。いわゆる亭主関白、家長として天野家に君臨しておりましたので、家では誰も逆らう者がありませんでした。

そんなお父さんに刃向かつたのが、良平君でした。

きっかけは、お父さんのお母さんへの暴力でした。お母さんにかわいがつてもらつていた良平さんは、子供ながらも、弱い者いじめをするお父さんに反発して、お母さんを守ろうとしたのです。

「良平！ そこをどけ！」

お父さんがそう言つても一歩もどきません。「お父さんなんか大嫌いだ！」。良平君はその時、そう叫んだのです。

その場はそれで収まつたのですが、以来、お父さんとうまくいきません。かと言つて、まだ学生ですから、お父さんの援助なしには、進学もできません。せめて岐阜を離れようと、金沢にやつてきたのも、そうしたことがきっかけでした。

以来、特別なことがないかぎり、岐阜の実家には戻らなかつたのですが、あれ

から四十年、なんだか、このままで一生終わつてもいいのかわからない、疑問を持つようになったのです。

自分はんばつて大学教授までのぼりつめた。風の噂では、実家の父親は寄る年波で、身体もよくないという。

いろいろ考えていた時に、天野先生は「聞き書き」という運動に出会いました。「聞き書き」運動とは、人の話を聞いて、それをその人の話し言葉で書いて、手作りの本にして、その人に差し上げるといふ運動です。

天野先生は、「これだ！」と思ひました。いろいろあつたけれど、お父さんの昔話を聞いて、一冊の本にしてあげたら喜ぶのではないか。それより、話を聞くことで、これまでのわだかまりが消えるのではないか、と思つたのです。

そして、「聞き書き」の講習会に熱心に参加し、見事に技術を身に付け、いよいよ実行ということになったのですが、やはり、勇気が出ません。そこで、まず、お父さんの弟、つまり、天野先生の叔父さんから、「聞き書き」をはじめたのです。

叔父さんはもちろん事情を知つていまから、天野先生による自分の「聞き書き」がはじまると、お兄さんである天野先生のお父さんに電話を入れたそうです。

「なんだか、良平がわしの話を聞きにわざわざ来とるぞ」

「なんで、お前のところに、良平が……」

「兄さんと仲直りをしたいと思つてるに決まつてるがね」

天野先生は、叔父さんの「聞き書き」を終えると、本命のお父さんに連絡を入れました。

なんだか、仕事でしかたなくお父さんに会うという感じだったそうです。そして、ついに、何十年ぶりに再会し、お父

さんとの「聞き書き」がはじまりましたが、どうもうまくいきませぬ。

そりやそうでしょう。お父さんだつて、いきなり、優しくなれません。以前より、威厳を持つて、上から目線じゃべります。それでも、続けました。しかし、溝はそう簡単には埋まりませんでした。

でも、天野先生の気持ちは、以前と比べて、晴れ晴れしました。何だか、あれほど感じていたわだかまりも消えたそうです。うまくいかなかつたのに、どうしてそんな気持ちになれたのでしょうか。

天野先生はこう言ひます。

「親父に会つて、話したおかげで、大事なことがわかつたんです。他人と過去は変えられないけれど、自分と未来は変えられるつて。これからは親父がたとえ昔のままであつても、僕が変われば、この先は明るいですからね」

天野先生は、また夏休みに、故郷にお父さんを訪ねに行くそうです。

『従軍慰安婦』

韓国の政権が不安定になると、必ず持ち出すのがこの問題です。学者・研究者の間では、ずっと前に答えが出ていることなので、「あれは事実無根です。勉強し直していらつしゃい」というのが正しいのですが、厄介なことに日本の中に「日本軍が悪いことをした」と思っている人が多いことです。「河野談話」然り、先日の韓国大統領と野田さんの会見で、一時間の間に四十分は「歴史問題」だったと、池田信夫さんのブログにあります。もともとの火付け役は、朝日新聞の植村隆記者の捏造記事で、朝日新聞がこれに飛びついて騒ぎを大きくしたということなので、池田さんがいうように、外務省から独立した強力な権限の調査委員会を作って植村記者を呼び出して、朝日新聞の責任をはつきりさせた上で歴史的事実を公表し、日本人の中の間違いを正すことが先決でしょう。いつまでも理不尽にせびられ続けるのは、もう止めたいものです。

